

# 翻刻「活動写真のトリツクを論ず。」

## 〈解題〉

大正五年に早稲田大学を卒業した乱歩は、大阪へ移り貿易会社の加藤洋行に勤めるものの、翌大正六年五月には辞めてしまう。その理由を、「毎日同じようなことをくり返して飽きないという耐久性に欠けていた。それと、合宿生活をしていたので、独りぼっちになって勝手な妄想に耽る（よくいえば思索する）機会が極めて少なく、これが私は耐えがたかった」と、のちに乱歩は『探偵小説四十年』に書いている。

乱歩がその人生を詳細に記録し作成したスクラップブック「貼雑年譜」の、第四四頁は「放浪（二十四歳）」という見出しで、その記述には次のようである。

「ソシテ、一月カ一月半ノ放浪ノ後、東京ニ舞ヒ戻リ、本所区中ノ郷竹町ノ仕事師ノ家ノ二階ヲ借りテ、身ノ廻リノモノヲ賣ツタリシテ露命ヲツナイデキタ。先輩ニハ顔向

ケガ出来ナイシ、父ノ家ヘモ帰りニクイシ（ソノ頃父ノ家ハ大阪ニ移ツテキタ）ドウスルコトモ出来ナイデ、一日一日ト決心ヲ延バシテキタワケデアル。活動写真会社ヲ訪ネテ弁士ダツタカラ志願シタノモコノ時デアル。當時ノコトハ左ノ随筆ニ書イテキル。

映画横好き 大正十五年「映画と探偵」誌（平凡社全集第十卷二収ム）

今ソノ随筆ヲ讀ミ返シテ見タガ、ヤハリ弁士志願デアツタ。上野ノ圖書館ニ通ツテ外國ノ映画ニ関スル書物ヲ讀ンダノモコノ時デアツタト思フ。ソノ智識カラ後ニ映画論ノヤウナモノヲ書イタワケデアル。」

会社を辞め大阪を出た乱歩は、箱根から伊豆の辺を放浪し、東京にたどり着く。そこで活弁を志願した乱歩は、弁士の江田不識を紹介され会いに行くが、この職業のつまらなさど収入の少なさを説かれて断念する。この時期に上野図書館で映画関係の本を読んでいた、と「映画横好き」に書いている。

「貼雑年譜」の別の頁にある、乱歩が住居の軌跡を記した「東京市ニ於ケル住居轉々ノ圖」で確認すると、21が「本所区中之郷竹町ニ間借リス」となっていて、期間は「六年六月頃。一ヶ月ホド」となっている。「京阪地方住居

移轉地圖」のほうも見ると、20「大阪市靱中通二丁目 加藤洋行二階ニ寄宿」が大正五年八月から大正六年五月、22「大阪市亀甲町父ノ家」が大正六年七月から十一月とある。

東京から呼び戻された乱歩は、このあと大阪の父の家でしばらく暮らし、タイプライターのセールズなどをする。十一月から三重に移り鳥羽造船所に勤務するのだが、ここも大正八年には退社することになってしまう。そして東京に戻り、古書店「三人書房」を開く。雑誌「東京パック」の編集や、支那ソバ屋などを経験したのはこの時期である。八年十一月には、鳥羽で知り合った村山隆と結婚する。そして「智的小説刊行会」という組織をつくり、自ら雑誌を発行しようと計画するのだが、刊行までには至らなかった。翌大正九年、「貼雑年譜」の七六頁は、「映画監督志願(二十七歳)」という見出しで、次のように書かれている。

「智的小説刊行会ガウマク行カナカツタノデ、同年七月ニハ、大正六年加藤洋行ヲ逃ゲ出テ上京シタ時圖書館デ調べテオイタ資料ニ基キ、映画論ヲ書キ、複寫ヲ取ツテ、目星シイ映画会社ニ送り、監督見習ニ採用シテクレルヤウ頼ンダノデアアルガ、無論何ノ回答ニモ接シナカツタ。ソノ論文ハ

トリック映画の研究 四十三枚

映画劇の優越性について(附、顔面藝術としての寫真劇) 九枚

ノ二ツテ活動写真論文ノ袋ニ収メテアル。」

この記述にもあるように、乱歩の映画論は、大正六年六月に七月に調べた資料をもとに、大正九年七月に執筆されたもの、ということになる。「東京市ニ於ケル住居轉々ノ圖」では28「本郷区駒込林町六。三人書房」「八年二月——九年十月」という期間に当たる。

『悪人志願』(博文館 昭和四年六月)は、大正十四年から昭和四年までの、乱歩初期の随筆を集めたものだが、内容ごとにAからFまで六つに分けられたうち、劇と映画に関するものが「E」の章としてまとめられている。映画については「映画横好き」「探偵映画その他」「映画いろいろ」があり、これらはいずれも大正十五年に雑誌に発表されたものである。

先に見た「貼雑年譜」の記述にあるように、「映画横好き」は乱歩が映画論を準備していた頃を回顧した文章で、当時上野図書館で見た書物として乱歩が挙げているのは左の本である。

Ratbun—Motion picture making and exhibiting

Talbot—Moving picture

Hufish—Motion-picture work

Dench—Making the movies

Hale Ball—The art of the photoplay

Munsterberg—The photoplay (a psychological study)

Practical Cinematograph and its application

National board of censorship

権田保之助—活動写真の原理及应用

梅尾庄吉—活動写真百科宝典

三田谷啓—活動写真に関する調査

このうち梅屋庄吉『活動写真百科宝典』、権田保之助『活動写真の原理及应用』については『日本映画論言説大系 第三期 活動写真の草創期』（ゆまに書房 二〇〇六年）で復刻されている。またミュンスターベルヒ（ミュンスターバーグ）の映画論の一部は『映画理論集成』（フィルムアート社 一九八二年）でも読むことができる。

リストにあげたこれらの映画論のうち、ミュンスターベルヒのものと権田のものに啓発されたと乱歩は書いている。

権田保之助『活動写真の原理及应用』は大正三年の刊行である。カメラや映写機のような技術的な面から、映画の美学あるいは社会的な役割といったところまで書かれてい

る。まだ映画に関する術語が定まっていない段階での、先駆的な著作であった。

ミュンスターベルヒ『映画劇 心理学的研究』は、心理学と美学の二つの面から映画をとらえたもので、日本にも大きな影響を与えた。ミュンスターベルヒは、「心理試験」の考案をしたことでも知られる心理学者である。彼は映画をスクリーン上のものとしてではなく、観客への影響という側面からとらえて、その錯覚の効果を重視した。

乱歩が映画の資料をあさった大正六年当時は、まだ映画についての理論書は少なかった。権田の『活動写真の原理及应用』は大正元年の刊で、世界的に見てもかなり早い時期のものと言える。ミュンスターベルヒのものは原書が大正三年であり、邦訳が刊行されるのは大正十三年である。日本映画界に大きな影響を与えることになる帰山教正の『活動写真劇の創作と撮影法』が、同時期の大正六年であり、『キネマ旬報』の創刊が大正八年であることなどを考えても、映画に関する言説の蓄積はまだ浅かったことがわかる。

日本において映画に関する言説が急増するのは大正後期であり、先の乱歩の大正十五年の随筆もその流れの中にあつたと言えるだろう。しかしすでに大正十二年に「二銭銅貨」

を発表し、探偵小説家としていくつもの作品を執筆していた乱歩は、映画論を書く方向へは進まなかった。

とはいえ、乱歩が映画への関心を全く失くしたというわけではない。『探偵小説四十年』の大正十五年の記述にはこうある。

「本位田準一君が、探偵映画のプロダクションを作ることを計画し、色々その方面に働きかけたことがあり、その計画に威勢をつけるために、横溝君に来てもらおうじゃないかと、私の名で神戸の同君に、「スグコイ」という電報を打ったものである。横溝君は本当にプロダクションが出来ることと思って、早速上京して来たが、そんな話がうまく行くはずもなく、結局無意味な上京に終わった。しかし横溝君は薬剤師よりも、文学の方に引きつけられていたので、東京に留まりたい気持ちもあり、私が間に立って、森下さんから『新青年』に入ることを勧め、遂に東京に落ちつくことになったのである。」

のちの横溝正史の歩みを決定づけるこのエピソードは、横溝自身も『探偵小説五十年』などの自伝的文章で触れている。

またこの時期には乱歩作品の映画化の企画も進んでおり、それについても「貼雑年譜」や『探偵小説四十年』に記述

されている。このように、乱歩と映画とのかかわりはしばらく続くのだが、その関係は原作者としてのものだけになっていった。乱歩の映画経験はこれから後、小説の舞台として撮影現場が登場したり、スクリーンにひとの顔面が大写しになる場面が描かれたりするといったかたちであらわれることになる。

江戸川乱歩邸に残された資料の中に、乱歩自身がまとめたいくつかの封筒入りの資料がある。これまでにこの『大衆文化』等で紹介してきた「人間椅子」草稿や、「D坂の殺人事件」草稿といったものは「EXTRAORDINARY」と書かれたものに入っていた資料である。他に「MUSIC」「LIFE&LOVE」「ECONOMICS」といったものがある。

今回紹介する映画関連の資料は「MOVIE」と書かれた封筒に入っていたものである。このうち、「写真劇の優越性につきて」については、「文学」（岩波書店）二〇〇二年十一月・十二月号で浜田雄介氏によって紹介されている。

「MOVIE」の封筒には「大正六年 二十四歳 活動写真論文」とある。

その中身は

映画論

活動写真のトリックを論ず

トリック分類草稿

トリック写真の研究

写真劇の優越性について

という五点の資料である。

これらは、内容的には、芸術としての映画の位置づけを論じた「映画論」「写真劇の優越性について」と、映画撮影における技術的側面を考察したそれ以外のもの、二分することができる。「会社、監督、俳優の名前を少しも知らない」と後に書いているように、乱歩の関心は偏ったものだったと言えるだろう。

今回翻刻したのは「活動写真のトリックを論ず」である。これは二十五字×二十四行の原稿用紙に書かれているもので、十二枚が残っている。振ってある番号は飛んでいて、おそらくは長篇論文の草稿の一部であると考えられる。

ここで論じられているのは、映画におけるトリックの意義と、その分類である。乱歩が映画におけるトリックにどれほど関心を寄せていたかは、乱歩の映画論のなかに占めるトリックの割合からも知ることができる。もちろん映画自体が一種のトリックであるということもできるのだが、

ここで乱歩が述べているのは、さらに技巧的な要素の加わった映像のことである。乱歩がこの文章を書いた時期には、たとえばメリエスの「月世界旅行」のような、映像を見て驚嘆するような映画はすでに下火になっていた。こういったなかで、多くのトリックを分析することを通じて、乱歩は映像トリックの可能性を考えようとしていたのだった。

映像トリックの蒐集と分類の情熱が、後年の探偵小説におけるトリック分類といったものへとつながっていったことは、容易に想像できるだろう。日本の探偵小説においては、トリックの位置づけが問題になっていく展開と、それへの乱歩の影響の大きさを思えば、この段階での乱歩の個人的なこだわりが、非常に重要なものであったと考えられるのではないだろうか。

(落合 教幸)



トリツク應用と云ふ事は、一時的の現象であらうとはいへない。大に此の點に於て一歩進歩すると申す。この點に於て仏の *McKee* 英の *Robert Paul* などは活動寫真中興の祖とも稱せらるべき人々である。

仏蘭西の手工使であつたメリーが最初考案したトリツクは「手品師の方の所謂 *Black art*」を活動寫真に應用する事であつた。即ち黑色の背景の前で黒布を以て身体を包んだ。恰かも無生物が自身で動く様に見える。手工品上のトリツクをこの活動寫真に撮影したのがあつた。この種の今日から見れば殆どトリツクの項目中に入らぬ幼稚な幼稚なトリツクから、一人の役者を二重に使ふ *double rôle* を用ひたトリツクに至る迄、トリツクの種類は中々多い。

一時活動寫真界はトリツクで持切りであつた時代がある。

112 水田甲行

を務むるに過ぎぬものと思ふ。

かくは述ぶるもの、この所謂トリツクなるものが、活動寫眞の發展に資した事は非常なもので、その功決して没却すべきでない。今日の如く興味ある寫眞劇のない、動くといふ事以外に余り看客を呼ぶ力のなかつた、「当時」昔日の活動寫眞に、偉大なる看客吸引力を与へたトリツク應用といふ事は、一時的の現象であつたとはいへ「その功正に功一級に値すると思ふ。」一天に注意すべき事柄である。この點に於て仏の *Meies* 英の *Robert Paul* などは活動寫眞中興の祖とも稱せらるべき人々である。

仏蘭西の手工使であつたメリーが最初考案したトリツクは、手品師の方の所謂 *Black art* を活動寫眞に應用する事であつた。即ち黑色の背景の前で黒布を以て身体を包んだ。恰かも無生物が自身で動く様に見える。「様な」手工品上のトリツクをその儘活動寫眞に撮影したのであつた。この種の日から見れば殆どトリツクの項目中に入れ難い様な幼稚なトリツクから、一人の役者を二重に使ふ *double rôle* の技巧に至る迄、トリツクの種類は中々多い。

一時活動寫眞界はトリツクで持切りであつた時代がある。

全す例らし、左盛と極めたものであつた。  
 然るに深ゆる事数年ならずしてトリツク映画は盛  
 えて来た。月世界旅行だとか地獄旅行だとかいふ風の驚  
 術寫眞は今日では見ることかある。然しトリツク撮影  
 法そのものが影を没したのちある。昔のトリツク映画  
 はトリツク其物か主であつた。このトリツクか亡びて今  
 影を運ぶべき一手段として取扱はれてゐる。かく下  
 リツクを主とする寫眞の衰へた原因としては左の四つを  
 掲げることが出来る。

(1) 寫眞かトリツクの叙法を知りて之に懐き、もつと高  
 尚な寫眞を求めしむる事。  
 (2) 影しきトリツクの種に盡き、映画全盛一律に墜した  
 (3) 攝止上の演劇に似たものゝ寫眞にして人物の注意を引  
 き得る種撮影法の発達したること  
 (4) トリツク映画を強するは、普通映画に比し多たの時  
 間と種より事多きを費用を要すること。  
 既に左の種々あげたトリツクフィルムに執着してゐる  
 者も、變化の自由自在を初も手数のかゝらぬ普通映画  
 演劇に劣り極(た)方を得るかといふ所から、左金記かト  
 リツク映(から)種々の缺がある。  
 序の目には、悉くトリツクは欠ある種の寫眞に移用せ  
 らるゝので、既に且してトリツクも主と見えてトリツクと  
 して寫眞の衰へた原因として、左の四つを掲げることが出来る。

122 水田印行

各会社は新しいトリツクの發明に全力を注ぎ、珍奇な映画  
 を売り出して、名声を陥すまゐると必死の競争に、汗を流し  
 た「時代がある」一ものだ。随つて中々好いトリツクが  
 「輩」一統」出した。Princess Nicotine などいふトリツク映  
 画はよく引合に出される名作である。

トリツク映画の特徴は、よく人が想像には描くけれど現  
 実界に於ては物理上の法則に反するものなる為、逆も行  
 はれぬ種類の事柄を寫眞的技巧により人々の面前に実現せ  
 しめて、一種の快感を与ふに在る。この種の好奇心は皆人  
 の持つてゐる所故、当時トリツクフィルムは隨

分すばらしい全盛を極めたものであつた。

然るに栄ゆる事数年ならずしてトリツク映画「が」一は  
 段々衰えて来た。月世界旅行だとか地獄旅行だとかいふ風  
 の魔術寫眞は今日では見ることが出来ぬ。然しトリツク撮  
 影法そのものが影を没したのではない。昔のトリツク映画  
 はトリツク其物が主であつた。このトリツクが亡びて今度  
 生れたトリツク映画に於て一は、寫眞劇の筋が主でトリ  
 ツクは従、筋を運ぶべき一手段として取扱はれてゐる。か  
 くトリツクを主とする寫眞の衰へた原因としては左の四つ  
 を掲げることが出来る。





られる。

然し、トリック主眼の映画と雖も、何か新味ある方法が伴ふならば決して捨てたものでない。凸坊漫画帖なるものが流行するのを見てもこの間の消息を解し得ると思ふ。只「撮影に」日時を多く要する点は「考」注意すべき短所である。

トリックの種類は極めて多い。過去に於て行はれたもの「丈け」斗りでも随分大変なものである。もう種がつきたとは云ふもの、寫眞的技巧の天才が出れば、またどんなトリックを發明せぬとも限らぬ。僕が貧弱な頭で考へた「ば」丈けでも随分新トリック応用の余地はある。随つて、トリック「の」方法を茲に列挙することは勿論、夫れを分類して「記」代表的のもののみ記すことも、極めて困難な仕事である。試みに僕の知つて居るものを集めて勝手な分類をして見た。こんな風にも見られぬことはないであらう。

トリック撮影の主たる原因となるものを標準として、トリックの方法を大体四つに分つことが出来る。即ち撮影器の把手に関するもの(1)フィルムに関するもの(2)撮影器のレンズに関するもの(3)撮影器以外の装置に関するもの(4)それである。

(第一項) 撮影器の把手に関するもの。

この種のトリックは、把手廻転の遅速、中「止」断、及び

逆行によつて生ずるもの「もの」である。これを更らに大別して四とすることが出来る第一は、

(A) 「緩漫」廻転を遅くするより生ずるもの。緩漫撮影法とも云はれやう。英語の所謂 speed pictures である。把手の回転を遅からしむるは即ち一定時に於けるフィルム面の露出を短くする所以で、その結果映写の際、映画面の活動体の速度が不自然「に」速くなる。活劇の所謂追掛物に於て悪漢が急行列車の屋根を「つた」つて逃げる。探偵が追掛ける。恰かもその列車が反対の方から来る列車とすれ違ふ。悪漢はその列車に飛び移つて逃げる。などといふのはこの方法によつたものである。■列車の速度の早いのはよいが、人間の走るのが不自然に早いのは改むべき点である。突飛な速度で自動車「を」ゲル／＼廻らせ「たりなどし」たり。役者を走らせたりして、不自然より生ずる滑稽の感じを誘ふなどは、この方法を善用したものと云へる。見る間に朝日が昇つたり夕日が沈んだりする寫眞を見るがそれもこの方法の一種である。特殊の装置を施してこの方法を極度に利用したものがある。看者の目の前に一ケの植









の眞個の人間の影画から電をついて、ポンチ風のものを作  
 り出した■由である。一時流行したらしく、それを「広」  
 商業上の広告に應用して大分効果を得たなどいふ例もある。  
 この影画式ポンチ風の映画が進歩して今日の所謂凸坊漫画  
 帖なるものが出来たらしい。昔活動寫眞の始めて興業せら  
 れた頃、今の様な「凸」ポンチ寫眞と、海岸の岩に激浪の  
 打上げてゐる景色の映画と何れを面白いと思ふか問はれた  
 ならその頃の人は必ず後者の不思議を採つたに相違ない。  
 今は凸坊漫画帖の持つて離さるる所以は、実物の活動といふ  
 事に左程の不思議を感じなくな「つた事と、」りこの種の  
 トリツクの妙を喜ぶ一般の□映画力が發達した事にあ  
 る。

所謂凸坊漫画帖にも製作法によつて二派がある。一つは  
 背景その他全面を一々書いて、活動すべき箇所だけ少し  
 づ、形を変へて行く方法で、他は、背景は終始不変の一枚  
 の画を用い「その画面上に」一人や動物の画を「描いてそ  
 の形に」「人の形又は他の動物の形に」切抜いて動くべき  
 箇所「を」文けにある変化を与へて活動せしむる方法であ  
 る。「後者は時間」手間を省く不性な「方法である」「やり  
 方で、□□に時間を取る困難はあるけれどもその困難に答  
 へるだけ、なほ以上に効果のあるのは前者である。近頃□

本「逆」の滑稽を以て勝る事は出来ぬとあらう。この点から  
 見ても可也面白いものである。共に動かぬ場合で比較す  
 れば、チャリヤーチャップリンが如何に滑稽な態度を示して  
 居ても、一枚の上手に描かれた  
 □見るものは大抵前者である。』ポンチ画といふものは動  
 かずとも可也面白いものである。共に動かぬ場合で比較す  
 れば、チャリヤーチャップリンが如何に滑稽な態度を示して  
 居ても、一枚の上手に描かれた  
 (E) 逆回転するもの。Reversals 撮影の際にヒルムを逆に回  
 転せしめて出来た映画を映写の時正式に回転することによつ  
 て生ずるトリックである。必ずしも把手を逆に回転すると  
 定まらぬ。焼付の際ノ手続、カメラの装置等によつて把手  
 に関係なく出来上るものもある。併しその理屈は凡て同一  
 である。この種のトリック応用の方法として重なるものが  
 三通りある。  
 (I) 下降を昇騰となすもの。昔の滑稽寫真によく、主人公が  
 巡查などに追詰められて橋の上から川に飛び込み、「巡」  
 追手が続いて飛び込んでアプ〜やうして居る間に、今度は  
 逆に水面から橋の上に飛び上つて逃げ出すなど、いふのが  
 あつた。即ちこれである。大きな球などが自りで坂路を上  
 り開いた窓へ飛び込むなどいふのもこれである。一寸中斷

132 水田行



へて来る。その女の顔が鼻の先には煙を吐いた汽罐者  
 者が一寸と隔て止まつて居る。合図と共にその汽車は  
 全速で前進を始める。この間にその汽罐者は  
 の方が汽罐者よりは滑稽寫眞の者である。百畫の汽罐者を  
 撮影すれば、その方の顔が、その汽罐者の顔より  
 い、汽罐者を遠くにする。その汽罐者は、その汽罐者の  
 へて来て、その汽罐者の顔が、その汽罐者の顔より  
 のは、その汽罐者の顔が、その汽罐者の顔より  
 をもつて、その汽罐者の顔が、その汽罐者の顔より  
 へて来て、その汽罐者の顔が、その汽罐者の顔より  
 へて来る。

(二) 二重露光

(A) 二重露光法 Double exposure

(B) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(C) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(D) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(E) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(F) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(G) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(H) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(I) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(J) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(K) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(L) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(M) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

(N) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

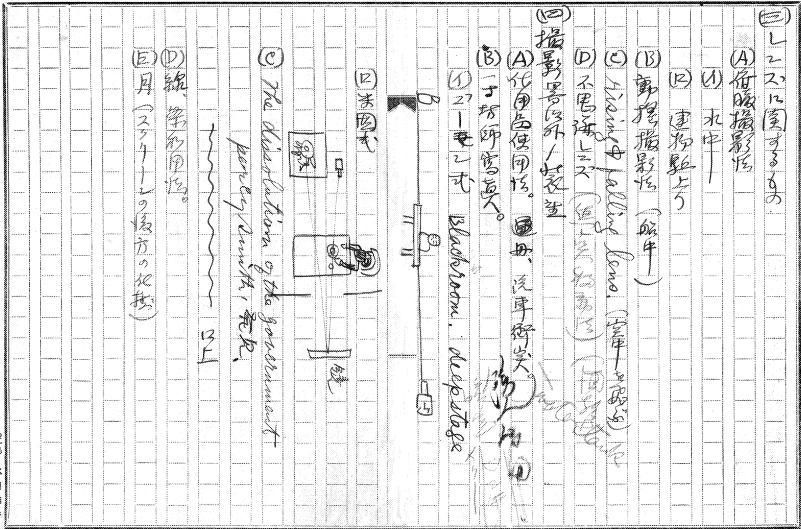
(O) 両方の顔が、その汽罐者の顔より、その汽罐者の顔より

撮影法と誤り易いものである。

(ロ) 前進を逆行とするもの。好妙なる一例がある。汽車の一  
 線路に一人の女が縛つたまゝ、横へられた。汽車は驀地にやっ  
 て来る。一人の男が走つて来て、將に汽車の救助器に触れん  
 として居る女を助ける。若し之を本当にやれば極めて危い  
 仕事である。マネジャーの採つた方法はこうである。先づ  
 男が縛られた女を抱えていそぎ足にあとじさりをしてながら  
 線路の上をやつて来て、大急ぎで女を線路に横

へて去る。その女の横つた鼻の先には黒煙を吐いた汽罐者  
 が一寸と隔てず止まつて居る。合図と共にその汽車は全速  
 力で前進を始める。それを逆回転法で撮影するところ  
 である。正式の活動をこの方法で撮影すれば、滑稽寫眞が出  
 来る。間違つた活動を撮影すれば正式のものが出る。こ  
 れが面白い所である。

(ハ) 破壊を建設とする。石膏細工が一分間で出来上つたりズ  
 タ／＼に切られた果実が元々通りの形になつたりするのは、  
 出来上つた石膏細工をうちこわすのや、果実の皮をむき実  
 をズタ／＼に切るのを逆に撮影したものである。これは、  
 中断撮影法と一緒にして応用すると色々なことが出来る。



12 25 水田印行

(二) ヒルムに関するもの。

(A) 二重露出法 double exposures

(イ) 幽霊の如く朦朧として現又朦朧として消え一度も現実のものならぬもの。即ち単純なる二重露出。

(ロ) 「幼」の如く一場面の上に又朦朧たる他の場面が現れ逆に場面の変ずるもの。(diaphragm)

(ハ) 朦朧として現れたるものが逆に現実の人となりて活動するもの

(ニ) 一人にて一場面に二役を演ぜしむる場合  
double rôle

(B) 二重焼付 double printing

(C) 両電

(三) レンズに関するもの

(A) 俯瞰撮影法

(イ) 水中

(ロ) 建物駆上り

(B) 動揺撮影法 (船中)

(C) rising & falling lens (空中を飛ばす)

(D) 不思議レンズ (焦点移動法)

(四) 撮影器以外ノ装置

(A) 代用品使用法 ■ 舟、汽車衝突

(B) 一寸坊師寫眞。

(イ) ローモン式 Backroom deepstage

(ロ) 米国式

(C) The dissolution of the government

以上

(D) 線、□利用法。

(E) 月（スクリーンの後方の仕掛）

（立教大学大学院博士後期課程・立教大学江戸川乱歩記念  
大衆文化研究センター）